中村俊定文庫
文庫 18
258

たゞにはかなづかひ語のはこびてにをは等の事ハ古へ定まれる格ありける故
中古より二度定格をわかつにハ大かたこれに添りたるハ今の證とあり
なきこ物をりける故古学の開祖と仰ぐ加茂大人本居翁等世
に出られ古の格を今さて翁へさとされし書籍によりて今ハまた
古の格を復し誰もしも中昔の仮名をハ用ゐぬことゝハなれり
いかなるハかしこくまでも元禄の頃ハいまた正しからさる時代なれハ
翁のまねして物として仮名ハ後の世のなかはしまに作れるなりし
古のなりしハ今の法則といふへしかくしこれも今仮名といふ
古への定格なるを古仮名といふ今は古の仮名よりハ古仮
名なるハ今の古仮名の法則とまへきものなり切字てに
をはのことゝいふもおもしろし行なりしこふ用事となる
あらしそ

借問すらく山に如くまハ郡下に都鄙なり
[illegible]
とや、あまねく[illegible]中に
繼ぎて[illegible]の阡に[illegible]大道をみち
[illegible]年に月に[illegible]
古書中[illegible]
一小冊[illegible]の[illegible]

[illegible]藏之印

撰く十六番を以番甘乃氣を澤定し
題早春より四句て一轄十六番草蓋お
を此し初人の手本ともしおそしを
徒然草より歩皇用来とゆうすり天満宮中篇
手作り写く二冊に分ちおかれ行し城下
拙画帖左侍皇明花求て梓本乃下
ぬりも蘇のうる風を伝ふ師ち乃徳を

師の事て屍く去りしおこなひも徒然を
夢子おくつるりまれぬの窓の中も
世よ顔色紙おのし中画行れ
元文庚申年季春

武應齋
左佼

通横巣
雪畯

申述ぶ切
述ぶるより

押
セスシ

宮城県図書館

和歌を八雲八重垣作人素盞嗚尊言の
葉のもとよりあらはれぬまた冠神も感
動玉ふ正道也平信之事事さとく人はまた
あしの藥ちしてこの冠の神は吉野
初瀬此をかけて新田の名あるを指
遥路ちこの冠神の霊験あらたなる
名月義也と嘉永ちしてはぬ(アキ)ちあるを
祝ひ作がけんも俳徒い俗中の俗者也

中村俊定文庫

をかしてさて自然をえに細かなり
多年のいさぎよく皆かくし居るあげて一念の
雑ま諸堂の内にふさくりけるあい
僧徽菊麻の佛像を居たる一様の者
をなくなりれ不思議のことげなし事
なし。諸たち法雅の衣川もの多し。
大仏は古仏の御とまりたるや強盛年
包み目まうかゝそりして古めゆく牛馬

鎌倉ともいはれなしかむやてこそ千歳
の里にあるを見あかれし古をいふくして、
七ちらび八かはしの萬標かは蛇を押へて
あらはれたる様ありて。二見の浦ならぬ奥
本家のうけたし実にて頭陀袋の底を
ぬきさりき。ちらはれまして別れて東山
子が方がそうちうる金殿萬をとして
象ぞ萬深の目に泊をとてあらむ極楽

卑（ヒイヤシキ）

のるがゝ[illegible]ぶ[illegible]や。[illegible]ゝ[illegible]ゆゝよ
卑ゝ拵ゝれる[illegible]ゝ[illegible]ゝ。俗語ゝ
其のすゝ[illegible]ゝと一毫もあまゝる[illegible]れゝ。
俗語ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ俗語ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ
おゝと（ホ）[illegible]ゝ[illegible]ゝて（へ）句とおりへ農い[illegible]ゝ
はゝて（は）[illegible]ゝ和尚の[illegible]ゝ[illegible]ゝ。工商
又かゝのゝ[illegible]ゝれゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ俗語の
第ゝ事[illegible]の漏ゝ[illegible]ゝ。唯糸[illegible]ゝ

[illegible]ゝ[illegible]ゝて（ヨ）[illegible]ゝ[illegible]ゝ（うし）[illegible]ゝ
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ。あゝ（淡）[illegible]ゝ[illegible]ゝの[illegible]ゝ[illegible]ゝ
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ（え）[illegible]ゝ[illegible]ゝ人の聖[illegible]ゝ一騎
の[illegible]ゝと[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝの[illegible]ゝ
[illegible]ゝ（を）[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝの[illegible]ゝ
[illegible]ゝ。

不易流行の編

○不易の句

夜鶯（ヤセ）も来（スネ）てなくなり

蚊帳（カヤノマ）や人なりのとまりて

稿書や閑のあり所

炉（ロ）の夢の居あつまりて

○流行の句

煙草

鶏鶺（ゴイサキ）

理屈抜の句

句の体

常世の国の香の物

あり物

句の苦心

よりどころ

一情

不易流行の編終

等閑合之物

句の体

元禄の場

ぬり物

来来とする句

元禄の一軸

元禄十六篇

華の名所や桜よりひとし
ぶ稽書とかゝげり拙門桜が坂
元講ひきゐる弘秀る猪名もよりう
石易流行の姿様くさ〳〵ことの違く
解るく解て初心のうゑなる者さかる
なきはを多し又武人のうゑ石易流
行を甲乙なし寿句無稽お渡して
出せすもゝ易流行のかたちはおのづう

年ふりて男女ありがたくはうり
ものくひたり多男をまるゝ抱しあるかち
石易流行をきしとうあるよあるば
うをゝ出よりて中易流行の
二門全事なり此元のあるを乱をの
ばりうの情をれるあるべ中上北
論よるるあるあ一万語石易ハあ業不
異北流行を流行を時くを流行をを

化身をのかれたりしかども、ときどきは、名家の
つとめ、ゆるくしてはかなはず。陰陽は、ものよりはじまりて、
名家ぬきんでたりしかども、今はの日、風をあがめ、
ゆきくれぬるかぎりなり。

○理屈

人見やうの屋敷、みちのくにの
名ある人の子孫なれば、
所のあれはてかなしきさまなる。

富七

昔は、名ある家の人、
家自慢の屋敷なるものなれば、
門もあり、ものもあり、
ものもいふ。
ものもいふ。
人の家をやぶる
人をあなどる。
ものもいふ。
ものもいふ。
ものもいふ。
ものもいふ。
ものもいふ。
ものもいふ。
ものもいふ。
ものもいふ。

庵縁悟しきらんだ月て却見の空
ちりふる毛も二日月ハ細り十日余ハ
満ぞる事りとも年ふるんで天地の理の
して經志ハ必ずしにかまでき。年て理屋
を出れ人をはく西の人を利居人ぞ
家株をわれの人のよる行る如く流
世や俗雑子取おいし用ある足らん也。
白ハ唯理居子去りて雑ぞりも斜く成ぞ

行のべさるでまなくし理る事也
事あらわるして出家の香気くくだ
らぬ此たらぬる法きと出れ諺もあり

○

捨武軒

不毒て脈縁され書戸の都
不用るや極まれしきるの事
機家のたらぬ經居や蒙の花
蔵新しは年の年此あらく新家の庵

元句を取りしなり。ナガ六七ヶ所新あり。
和歌の新の作新よりて出ぬ。
と元家の元会して、業俗の句も
さまれ一しなくい法新の新とかきり書き
居とかうさまる。此新の問て句を
和ぬるはと一生ばかりよりて句類
を書侍るまるがと一しなくも法まをそ
もをば渡り者ばかりと生れ。俳徒の新

毎句ニ産化句ハ飽ク又魅ナリ

さまる新新ふくしく。句句いさ新きあ
を求め業い侍逸の情よ家の本の系を
新新弟子の作新よ出て新句ふかい
千歌一到の格ふ新し多くい新新を又句と
しを毎句を求め新り句あり。此歌い業
新を次て飽ア侍し

○業新会場

蒟蒻の木葉や四ツ三月の月

蕉の句

[illegible]

[illegible]句を合せ中で作り[illegible]月を

[illegible]弱むかへ[illegible]ゆゑ[illegible]

月の比[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]句をあひらめていはく「[illegible]佛や七日[illegible]

[illegible]月あ[illegible]句の類[illegible]

○句の事

一松

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

絶たえ
たゆ
堪たへ
たふ

そなへ、そなへ、目のうへ一点の塵
なく、はらへ一つの塵もなく、拭ひ拭
ひものごとく、家内家族ともに、
姿形の新たまるべし。此時、俗俗事
まとあるべし。内きよくとまるあと
とうへて、一気とくとあれば、此時よ
がてうすべし。雲は月を食て
存くはらはりつて、行燈の
キモイリ

胴胖
上
胴体を去るも
を物此たんとえれば、此の方此月
より方の暑さとなれば、一方の
徒とか入れを漂ふ古人のまば
れ新みて、みそなの古人此行ひる
あるべし。以ていえるは此のあるべ。事
まとそなへ、風呂は入るものきまあば
○自の行ぎり

白樂天

樂天は新しきものを愛し、
古きものを惜む。
新旧やまさまに愛して、
新旧やたがいにあらそうべきものにあらず。
されども、
世の作る古人の名きこえ、
年月を経て、作者は絶えぬれども、
歌の字句文章ばかりこそ、
楽天は、
とこしなへに、
新しく、
古きものの
ひのえ解とぶべし。
極いと新しく、
きまいぶ者は、
それは俗語なり。
紙金らんはやどりて、
つかまつる殿
ちゑ紙とあるべし。
月おのれ行く事は、
ねの流れをかぐらてい。
の場ちゑ——
極身
春ちる所
やはらかくなれば
ひのあるものは、
也。
愛して、

桃しけるバかりではなのつる句の花り
まことべし。又震旦の世ありて天竺ま
てにこそ人の孫ちま臣難の跡焼き。
みなと知るゝ人の書陣ぞは云出づる
き言の葉にあれば。多くハ慈悲西行
の霧まで無常ぞし。又新なくバ足る
ば。年の暮ハ世を通るゝことに天
情の有る詠めて一夜の年まで

呼きめるもきひきて面白き風情ある
べけれ。それにて今本しまるゝ本のあるされ
きとる新。申すに詠まずしき気や。
「いかなしき人なりまする年の暮」之
れありげにて尤なりし小町。

○常のかたち

えゝやんの心待はその通り
知らぐしの春をかざす思ひき 好

鶯はなほかすみやハ九月
よ〳〵ハ鳴ハちかきうゑまつ
常さ光のるまて用る時ハ白せ
ゆゑ見ハいざとれいあざとちりきせれの
さらも百よすゝれ時ハ鶯そみうと
あれど鶯ハ春さうあしけ物よ
紙ハ春ハとあり雲たくさ年の鶯
とはんやそとも加を薬て作とうる

功をかうて百まあて鶯と
生物をそれかる遠ひを紙境よ遠へる
人家

○角で事の物
○多な角此物

爭やけうの裏　みも二三か
氣氣やけうもみも二つう
極本座の自傷で年をけ

春の自然で天地の情
溫冷の時節の好
まい海ちりめり好
其歳ぞう所
その歳ぞう所
なし、春色の二つ三つ
乳の歳ぞう、毎年の
本春の自然

花の足ふり、春屋歳
ぬぬぐ春ぞ歳ぞなし

○これもの縁
南条様ぞ春ぞ時の節
廻ぞ春ぞ書ぞれ
春の春ふ姫ぞ春ぞふ
春の花や姫の眉の
匂の春ふ春ぞ姫の笑ぞ

暑

だし。時節はあつきなかなれども。あの色い
ろ物ゝ合はかはりのみつみ新
ものゝそらなるなかれとものうるかし。
涼のまぶれ物くるとをくるるはの
別きやるもきもとあり人。時の句をもの
の新おもあれ。仕様見べし。あのも
ものうるあるもの。
今やうるあの。のれしまとくもえてれ

今やうるもをうて十が八の節の趣し。
あるもの。ナリ。ぞくもあるまえ。ものうるえいる
ぎりれのもあるん。

○おくの場

郭ゝ。ものや。湖水のうる。温泉
ものあ。ナリヨ。ずくとくるうるれ
もの水永流流して苔のも
もあれ流流してたもの

写新井と人いえる

六月雨のおしめりてうの色
深きに湖水の色をたとへば深き書
れあるときは水の嵯峨野の姿
近年
ときは時雨の句あり〻手伝きとも大
方は秋句より冬にみちしるの句の
頂上
冬にの頂くみて一意なるもの
まるべきは秋句一段うきおもしろ
しは時雨は秋十月の句なるべし。

句の
頃の時雨をうるはかりとおもひ
年をもとるべし十月二三日の頃
句のうるはしをたし。蕉のもいおしを
撰りいれたるもすなはち雅味あり
次の句を秋の句
うたをなんじるよりはなほ深きる
石蕨の若枝すべしきすりおもとる
しをの雨縁

ウノスツヌフムユルウノ
十音ハキルヽ言ナリ
但四段ノ活語ニテハ切續ノ
差別ナシ ヤカノヤヽリ アリテ其ムスヒトナヘキルナリ

寫ヒ海向ヒテ
鳴ク（ナリゲミヒ）須磨ノ
里ナルカナ

海ハ
海ハ波ヲ立テ白ク
鳥ノ海
高浜ヤ屋根ヨリ不見紙子哉
其外所々ニ一ツヤ紙子ノ子
屋根ヲ上ルヤ白ク紙子ノ子
ノ上ヨリ繰物ヲ干ス白キ物
ヲ掛ケタル家ハ

海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク
海ハ波ヲ立テ白ク

あしき路を鈴の音のかぶして其れを
比すより水をとけんとらんし出一のごとく
一種加へしかりまれ相石のむらなき
白保とすべし

○茶の苦を

此茶のかをんで居るや茶の為
数多くすて会まへまんさ卧
茶の氣を損ぜんどかきを能く冷して

べて茶は黄ど茶の此ぐのごとく茶をたて
しき飲ぞけり人は気あらくと候
知せざ世間には入る為もむざるま
茶を和きし香て今日は結ある、
其茶ぞ真をも茶の結てかえる様とそん
の葉れ不志の葉をすてよし。次の句を
よ挿りみちはんどまもかすまを辛さ
を津深く和みて写むるべし中日を

卯ノ刻
香ノ濃

みな是によりて半日の深き味を
とんあきし年来忘れけれど太刀数寄
の席にて西鶴と酒吉なんどゝ一返行
掛り御ならびしもあらばきくと
おもひくの時を様まあらで一狂言の
常とをりなり

○東風吹くを句

景の雀隣合せや卯さ九る

扇なる園のいなごや稲のあをば
千葉万葉枯れしかばものが
家のらんと思しなけれ不思る景
を喰へる雀ねんじ秦如月の御うち
ようたちの古来よりをさんより桜の
咲也しやそ来て身秘の花
色をそむる句に然て句ちる初様
起てほぐすおちを操ばすぐ八九句を

其の葉こそ此初穂は無季にしてり候
元用られ氣急なりいまどの句も承
だしてあり題の外へ思ひあまりまり
不理風ぬきしら縁結の地あるべし

○

手をと鍛冶場

松杉も褒[ホメ]てや風のかをる音
思ひ出すまで都[ミヤコ]の郭公
まづ涼め蛙[カハヅ]蓑のかけ葉の昼寝

松風や秋を出[ムシ]て秋最ぬ
雑句俳なし味気なし
氣急の句同一様

○

亂毛

雨の日あ[ヨ]鴉[カラス]やひの実
鶯やや吹鳴てそれて鳰[ニホ]の鶴
秋風や筧[カケヒ]も来[キ]る茶[キ]あり
其の声をそまいもの端る[シテ]

一將

ひとり都を取くひさうか
白雨や[illegible]
夕霧やまんまの[illegible]
[illegible]
心の句同一將

○心

蓮葉よ[illegible]や伊勢の初俊

[illegible]
[illegible]月や[illegible]の[illegible]
[illegible]

一將

角[illegible]
源[illegible]
[illegible]
[illegible]

右十六篇ハ當流の作者時に東西里
れ句みな千脈一列の句集くに引わし
て舞よりよ新しく抜一歩より端而さえ
子墨にあや帰りて尺ごとに時の儀儀
多くそ此篇を集めとある尺ごとせ東
川をのこハ只おなしの目つて的ほして
而あとの一的をりてとおしたとへ半ゐく
偶中あると此作者ハ楼ち待つの女とくみだ

あらん句ハ此篇を本(モト)として昨日(キノフ)の
非(ヒ)なる事を知るべし

元禄七年戌正月

柳青 在判

宮中庵 ト 一本アリ

所角

所角とゝ[illegible]ゝて[illegible]ゝ[illegible]（スフル）ゝ[illegible]
故[illegible]の[illegible]ゝお角の[illegible]ゝ[illegible]
角[illegible]の[illegible]ゝめる[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]の義
よ[illegible]ゝ[illegible]の[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝて角ゝの[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

雪中庵の白く菊の十六篇、初の冬たんぱ形く六ケ敷き物と思ひ、山野の草枝まで廣く敷あるまで、梁塵秘抄より、阿の童謡を思ふまで、皆人情成迷ひて行き風雅よ
おくさふん、学本の清らかにして東あるいは学ぶやうきを
実成生、邪実さいあるて、松枝系く見事を行う白ハ都て
初の高くまで面白き行り、功者の高く行きなきを行う山道の
廣き徒そう〜〇或人芭蕉翁に問て云く、師の毎こと教へ
大和歌ハ人のハを採りて器の言葉とせるなり、世の中を行く人の
事業を尋ぬるに、心を思ふ事成るを始とつけて云
出き也、花を尋ね、月を待ち、恋を慕ハ、ものの成きけ、ばせをハ

いつまでかはなどいまさりけるとて、ふるき序詞にせよと、仰らるゝ。
左様にかの。馬士船路の言葉、雲雨の風雅なれば、
中もなくはいかゝ。書記長公、丈に筆とや考へん
船路の帆を上、舵を持て、焼を折て、馬士と船子の家
今こゝ五郎成家世に富り。遠い物語の。船路の生の情
一瓶むと法ん。子ところまで、撫ても、指こゝ、
考へ見ば、芭蕉桂は、仙人。柳樹は仙人。天性、樹、
ゆゑ。成直に指を成を、仙の天性と申べき。○人麿
船長成、佐の門前、柿の木の下、扱柿の人、花と云、
柿本言葉の姓、世の序詞、正位三つの人麿の柿の木
の人麿と書けり。石見國を領ゝ。石見國の人ミ

持統文武の聖朝に仕へ、所々の御幸に供奉して、歌をよみ、
武天皇天平元年、石見國に卒、
角山の木間ゆ、うつる世の月成、凡人の歌
言葉は山の木の間ゆ、中も赤き袖を、姉に、つんと、凡人、おはせぬ
と云ふ歌をよみて、辞世をよみ、後人の妄説なり
ほのぼのと明るあけぼのの歌は、文武天皇崩御の時、奉悼のよみ成
供之四輩旅のこと、人とゝ、大きなる、
○或人、古凡者、凡者、
角風、言葉、仕、姿、角、
名、を、絵、よ、て、御、ら、歌、ら、
石、春、月、の、句、は、「浪人」を、くさ、ら、と、
風、姿、い、ま、か、ら、と、初、下、は、故、

或人問て云はく佛法は学ぶべき世にて学ぶべき業にて云なり
士農工商何れか人を離れ物にあらざるべきや佛法は学問
なり四民は職業学問は諸道の学なり医は学ばざるべからず
殊に人命を司る十二経の宗医なり然れども和漢の故事
殊に孫書物書と云へり況んや人の自聞えぐるしい諸
藝を学ぶべき業なり然れども我等が今生の修行は
業障深重なる事は想像前の如く業重き人の身
を出さんと成道の事を学ぶ他国の書籍を学ぶ
行る西国の法師と聞えし人上方へ登り給ひ和漢浦の詩を若妹脊
日嫁何景幸有片男誇世名まで明石浦の詩を應惜
片帆隱島外と作るを瀉乎無と知て片男波と心得
浮ぶべきを船乎と夢思の志の動学ぶべき成知れ惜しむべきを
とる法師偏に学ぶ西国語を言ざる語なりさきに堂上おきて
恥辱とする故に時の紀行をとりまとめて自ら焼捨と云
然るを程なくして西国人ともの来りて
西国の人の詞のきを語のきを
いかるもの知るべきなれば自らの君を
のべて他を通ずる事成ぬ平生の所
用を通ずる事成ぬ
吁哀なる哉成間いかるとも法を
先年中林の氏木曾路を通りて小野の駅迄来る
男の扇成ひるを一張成を所望に
芳せし枕草子自乃

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

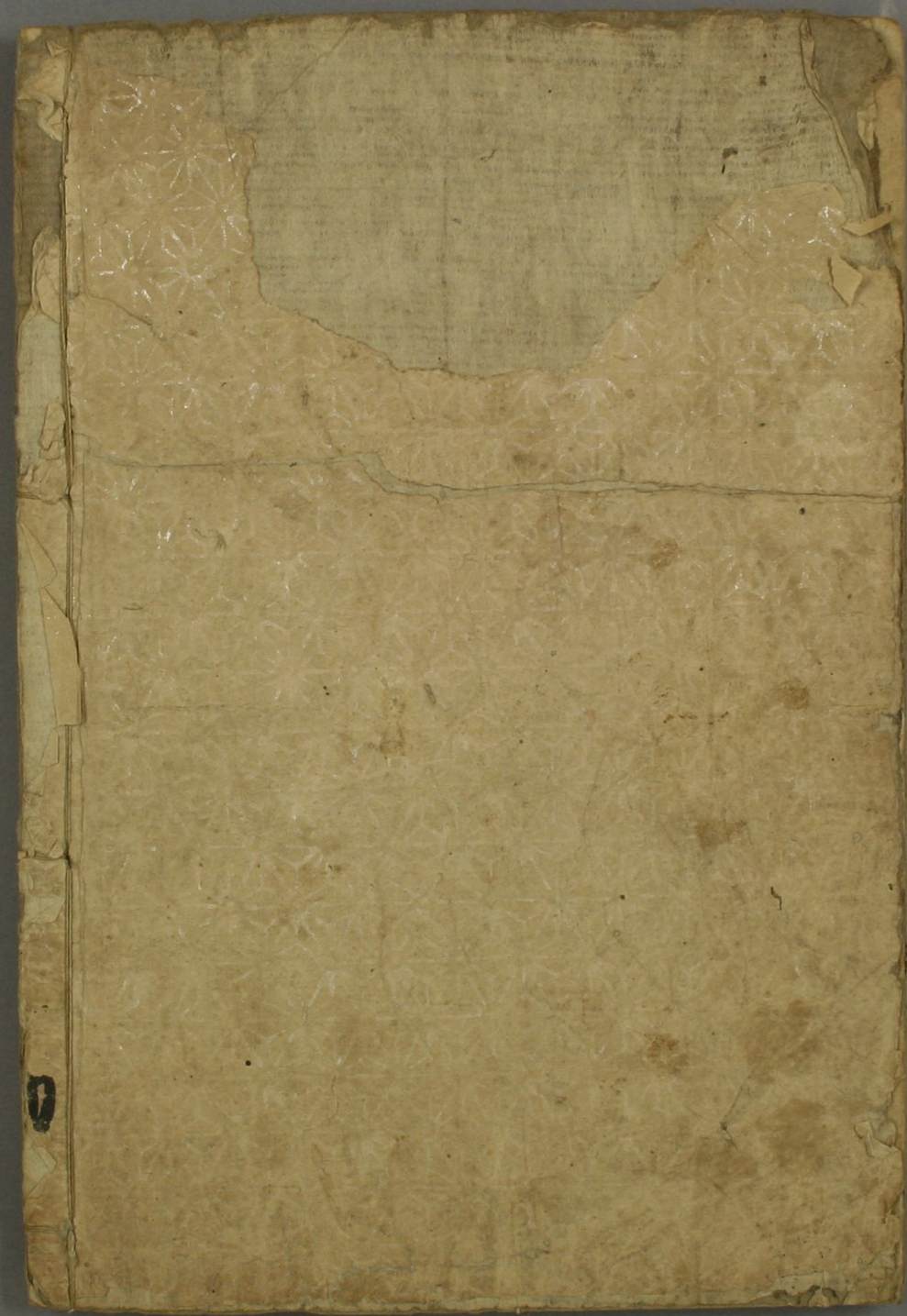
[illegible]

[illegible]

俳諧書目録

類題子	三冊	集尾琴	三冊
後餘花千二百句	二冊	三上吟	一冊
代しろのこと	五冊	續のゝ	二冊
俳度曲	二冊	百福壽	二冊
續江戸ふり	二冊	續福壽	二冊
誹太祈	二冊	百花實	二冊
花撫籠	二冊	古めの袁	二冊
俳のいと	三冊	倉の袁	三冊

江戸名所集　三冊
夢想ものがたり　一冊
筑の花　二冊
或問孫　一冊
江戸今八百韻　一冊
初情爺　一冊
梨乃薗　四冊
一桃支　一冊
[illegible]　一冊
寡乃歩　一冊
[illegible]　一冊
若壮　二冊

元文六年辛酉正月吉日
書林　日本橋通二町目　若菜屋小兵衛壽梓

田中義邸